

# 子供が思いや意図をもって表現する歌唱指導の一考察

## —小学校低学年における授業実践—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教育分野 西出 真理

### 1. 研究の目的と方法

本研究は、連続研究2年目として行い、子供が思いや意図をもって表現する歌唱指導を計画・実践し、検討することを目的とする。

昨年度の研究では、小学校音楽科の歌唱の活動における主体的な学びを思いや意図の形成とそれを実現させる試みの過程として捉え、これを促す授業の手立てを計画し、検討した。音楽科における「子どもの学びの過程」(図1)を図に表し、これを活用した授業の構想と、それを促す指導の手立てを授業の中に取り入れることで、音楽の歌唱の活動における思いや意図、表現の実現が可能になることを確認した。

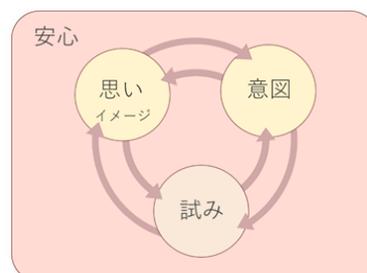


図1 子どもの学びの過程

高学年の子供は、感じたことやイメージしたことを言葉や絵で表すことができ、それを手がかりに「子どもの学びの過程」のやりとりの中で、思いや意図の表現や共有が可能となった。

しかし、低学年の子供は、「イメージする」という抽象的な行為そのものを理解しにくく、言葉だけで思いや意図を表すことが難しい場合がある。小学校学習指導要領音楽編には、「低学年の児童にとって、曲想を感じることに思いをもつことは一体的であることが多い」(p.31)と示されている。さらに、「実際に歌って確かめていく過程を多く取り入れるようにすることが重要である」(p.31)と述べられており、子供が歌う〈試み〉(以後、「子どもの学びの過程」における言葉は〈試み〉・〈思い〉・〈意図〉とする。)を通して、自分の〈思い〉や〈意図〉を具体化していくことが求められている。これらから、低学年の子供においては、歌うという具体的な活動を中心に据え、その過程で生まれるイメージや思い、意図を外部化できるように支援することが、子供自身の表現の実現につながると考えられる。

本研究では、子供が安心感のある学びの雰囲気の中で、イメージすることを段階的に経験し、そこで生まれた思いや意図を外部化させることで、子供の表現する力を引き出すことを目指す。

この目的に対して授業を構想・実践し、ビデオ記録・発話記録・振り返り(記述)をもとに、子供の表現する姿を考察する。

### 2. 授業の構想

#### 2-1. 授業づくりの考え方

本研究において「子供が思いや意図をもって表現する」とは、自分の好きや心地よさなどの感性を働かせながら、「こうしてみたい」という音や音楽を見つけていく子供の姿のことである。こうした子供の姿を、主体的に音楽を表現する子供の姿とする。

主体的に音楽を表現する姿は、低学年の子供だからといって簡単に見られるものではない。子供の表現活動に消極的になってしまう要因の一つとして、主体的な学びのややこしさがある。新野・市川(2023)は、「自ら進んで活動をしていれば積極的な活動をしているということが出来るが、その活動が教師の意図や保護者等の期待を読み取った結果に過ぎない場合が考えられる」、「主体的な学びを実現する授業を実践しているつもりが、従属的な活動を強いたり、子どもの気ままな活動を促すに終始していきってしまう恐れがある」(p.236)と説明している。誰かの意図的な価値や判断に考えを任せてしまうことで、自分にはできない、できない自分を見せるのは恥ずかしいと思い、活動が消極的になってしま

う。また、教師自身、価値を押しつけようとしているつもりはなくても、子供にそう感じさせてしまう授業構成や指導観（声のかけ方・問いかけ方）に問題がある。

「子どもの学びの過程」の図をもとに、まずは、安心・開かれた雰囲気づくりを行い、子供自身が感じ、考え、試みたことを肯定的に認める姿勢を大事に授業を実践する。そして、子供自身が授業をつくり、課題を解決することが習慣となる手立てを考える。次に、安心・開かれた雰囲気を土台とし、歌う試みの中で、思いのもとになるイメージを思い浮かべる活動を段階的に学習する単元構成を考える。

## 2-2. 安心・開かれた雰囲気づくり

授業の雰囲気づくりにおける昨年度と本年度の違いは、「開かれた」という言葉である。子供が誰にも何事にも臆することなく、自分の考えや意見が言えたり歌えたりすることができる様子を「開かれた」状態として言葉を使っている。授業中、子供自身が感じ、考え、試みたことを尊重し、自らの表現を見つけようとする楽しさや面白さを活動の中で実感させる。そして、挑戦したことが、新たな学びの糧となるようにその行動や成果を価値づける。

また、振り返りカード（図2）を活用し、子供の感想や、やってみたくて思ったことを授業内容に取り入れることにより、自分たちで授業をつくる気持ちを促していく。

が 月	に 日	♡	♡	♡	♡
		まだまだ	もうすぐ	できた	かんべき
今日、思ったこと、はっけん・はつめいたこと、できるようになったこと など					

図2 振り返りカード

## 2-3. 様子を思い浮かべるための単元構成

思いのもとになるイメージを広げるために、様子を思い浮かべるための学習を計画した。

まずは、役割としてのイメージをもつための学習を位置づける。「いるかはざんぶらこ」（小学校の音楽2・教育芸術社 p.35）の教材を使用し、1番の歌詞に登場するイルカを身近な家族に例えてイメージし、そのイメージに合った歌い方を試す活動を仕組む。

次に、キャラクターのイメージをもとに歌い方を工夫する学習を位置づける。「あのね、のねずみは」（小学校の音楽2・教育芸術社 p.50-51）の教材を使用し、歌詞の言葉の意味から、のねずみ・ふくろう・みつばちのキャラクターのイメージに合った歌い方を見つける学習活動を取り入れる。

そして、物語の流れや登場人物の気持ちをもとに歌い方を工夫する学習を位置づける。「小ぎつね」（小学校の音楽2・教育芸術社 p.56-57）の教材を使用し、登場人物である小ぎつねの気持ちや物語全体の内容からイメージを広げ、小ぎつねの気持ちや様子に合った歌い方を見つける学習活動を行う。

最後に、自分の感じたことをもとに歌い方を工夫する学習へとつなげる。「夕やけこやけ」（小学校の音楽2・教育芸術社 p.54-55）の教材を使用し、音や歌詞から曲の情景や自分が感じたことをイメージし、そのイメージに合った歌い方を見つける学習活動を行う。

## 2-4. 「やってみたくて」が続く指導計画

筆者の勤務校では1校時を40分で授業を行っている。授業実践では、1時間の中に2つの学習活動を取り入れて授業を行った。例えば、「あのね、のねずみは」の指導内容は総2.5時間を7つの活動（第1時は2つの活動、第2時は4つの活動、第3時は1つの活動）に分けて展開し、1つあたり10～15分程度で構成する。これらを他の学習内容と組み合わせる計画である。（図3）のように学習内容を分けることで、繰り返し曲を味わうことや愛着をもつことができ、より表現の工夫を見つけやすくなる。また、飽きずに楽しみながら取り組めるという利点もある。前時の学習が想起しやすくなるよう、板書や掲示物の工夫、別の活動とのバランスを考えながら取り組むことが必要である。

◎ねらい ○学習内容 ・学習活動		知・技	思	態
第1時	◎曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて理解する。 ①曲との出会い・動物確認 ・「あのね、のねずみは」を聴き、様子を想像する。 ・歌いながら、どんな動物が出てくるかを確認する。 ②お気に入りを見つける ・歌いたいところを決めて歌う。 ・曲の面白いところや気に入ったところを交流する。 (擬音・リズム)	① 知		
第2時	◎旋律を聴き取り、その働きから生まれるよさや面白さ美しさを感じ取り、聴き取ったことと感じたことの関わりについて考え、どのように歌うかについて思いをもつ。 ③言葉の意味を確認しながら、のねずみの様子を想像して歌う。 どの歌い方がイメージに合いそうかを考える。 ④2小節のコーダ部分の歌い方を考える。 ⑤言葉の意味を確認しながら、フクロウの様子を想像して歌い方を考える。 ⑥言葉の意味を確認しながら、みつばちの様子を想像して歌い方を考える。	② 技		
第3時	◎音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習に取り組む。 ⑦想像したことや思いを確かめながら歌い、自分たちの思いが表現できたかを振り返る。 ・求めていた表現ができたかを確かめる。		① 思	① 態

他の学習内容 10分

あのね、のねずみは 第2時④の活動 10分

他の学習内容 15分  
振り返り 5分

図3 「あのね、のねずみは」の全体計画と第2時④の展開

### 3. 授業の実践

#### 3-1. 対象・時期

山梨県内の小学校 第1学年・第2学年、2025年9月～2025年12月

発話記録のTは教師、子供はイニシャル、特定できない子供の発言はC、CCは複数の子供を示す。

#### 3-2. 授業の実際

##### (1) 安心・開かれた雰囲気づくり

安心・開かれた雰囲気をつくるために、子供の試そうとする気持ちや行動を肯定的に認める姿勢を大事にした。授業が計画通りに進まなくても、子供の試したい行動や思考に沿って、内容を変更した。

第一次の1時間目、「いるかはざんぶらこ」の曲と出会った。その際、教師は歌入りの曲を流しながら子供に聴かせた。子供は曲を聴きながら、自然に身体を動かしたりリズムをとったりし、やがて、その旋律に自らの感覚で音やリズムを合わせようとしながら歌い始めた。この時、教師は「こう歌うよ。」と教えず、「よく聴いているね。」「音やリズムがあってきているよ。」と、子供たちが曲を楽しみ、覚えようとしている姿を肯定的に認め、励ますようにした。

また、振り返りカード(図2)を書く時間を設け、その内容を次の学習内容に取り入れるようにし、自分たちで授業をつくっていく気持ちや挑戦する気持ちを促した。初めは書く量が少なく、内容もつたなかったが、それを授業の中で紹介したり、活動を取り入れたりしたことで、「自分がやってみたいことを言っている、書いていい、先生が取り上げてくれるから書きたい。」という姿が見られるようになった。SRの振り返りカードには鍵盤ハーモニカの学習後、やってみたいことが記述してあり、これを次の授業の学習内容に取り入れられたことで、満足した気持ちが記述されていた。(図4)

さらに、振り返りカードの記述を教師が紹介し、共有することで、自分の感想だけでなく、友達の方や感じ方とも関わられるようになった。

##### (2) 様子を思い浮かべるための単元構成

##### ①身近なものに例える役割のイメージ「いるかはざんぶらこ」

「いるかはざんぶらこ」の教材を用いて、役割としてのイメージをもつ活動を仕組んだ。低学年の子

6月11日 れもんさんのうたを めろでいおんでひいて みたい(原文ママ)	6月24日 かっこう みんなきれい だった。れもんさん のうたができてよかつ た。(原文ママ)
---	---

図4 SRの振り返りカードの記述

供にとって、家族は身近な存在であり、それぞれのイメージと結びつけて歌えると考えた。

歌いながら思わずイルカの動きをしていた子供に向かって、「それは家族の中の何イルカをイメージ

して動いていたの。」と問いかけた。これをきっかけに、赤ちゃんイルカになったつもりで歌ってみようという流れになった。それぞれが思い描く赤ちゃんイルカを表現した後、教師が「どんな風に歌っていたの。」と問いかけると、IYが「ええと、おれは、いるかはいるか親子でいるか」と鼻にかけたような高い声で歌うことで答えた。そこで教師がIYの声を真似て「こんな感じのね、高い声だったね。」と言葉にした。さらに、「赤ちゃんイルカだから、波はどんな感じなんだろうね。」と教師が問いかけると、手で小さい波をつくって動かしている子供が数名見られた。そこで、教師が「ちっちゃい波だね。」と言葉にした。(表1) この時期の子供は、自分の表現

発言(原文ママ)・動き	
CC	(イルカはざんぶらこの歌・歌いながら両手を重ね口の前で動かしている)
T	ねえ、みんなどんな風に歌っていたの。
CC	(口々に何か話している。)
IY	ええと、おれは、いるかはいるか親子でいるか(鼻にかけたような高い声で)
T	こんな感じのね、高い声だったね。うんうん。(IYの声を真似て鼻にかけた高い声で)
CC	(教師のなげかけに対してイルカの鳴き声のような声で答える)
T	ねえねえ、赤ちゃんイルカだから、なんか、波はどんな感じなんだろうね。
YM	ちっちゃい。
CC	手で小さい波をつくって動かしている
T	ちっちゃい波だね。じゃあ、ちっちゃいざんぶらこだから、ね、ちっちゃいざんぶらこで歌ってみようか。
IY	ちっちゃいざんぶらこ跳ねるぞー。

表1 授業中の発話と動きの記録(9月24日)

を言葉にできない様子が見られる。子供の表現を教師が言葉にし、それを子供が確かめながら、色々なイルカを試していった。お父さんイルカは大きい動作で低く大きい声、おじいさんイルカはゆっくりとした動きでしゃがれた声、お姉さんイルカはしなやかな動きで高く優しい声で歌う姿が見られた。振り返りに記載された役割を取り上げたが、より変化が分かりやすそうな赤ちゃんイルカ、お父さんイルカ、おじいさんイルカ、お姉さんイルカという順で試し、それぞれの役割のイメージをもった。

②キャラクターをイメージして歌う「あのね、のねずみは」

「あのね、のねずみは」の教材を用いて、キャラクターのイメージを歌詞の言葉から広げる活動を仕組んだ。歌詞の鳴き声や擬音が楽しく、子供が歌い方を工夫したくなる考えた。

歌い始めると、鳴き声や擬音の部分や最後のフレーズを中心に動きや声が出てきた。何度か歌うと、「おちゃめってなに。」と、3番の歌詞の言葉に注目する発言が出た。これをきっかけに、みつばちの「ブーン」の歌い方を見つける活動が始まった。歌い始めた時の「ブーン」は、これまで子供がもっているみつばちのイメージの「ブーン」であった。そこに「おちゃめ」の言葉の意味が加わり、それをどうにか表現しようとする姿が見られた。

10月15日の授業で、教師は「今の良かったような気がするけど、みんなはどう。」と問いかけ、自分たちのイメージした「おちゃめなみつばち」と合う表現なのかを確認した。ST「なんかさ、ふくろうみたいになっちゃった。」、C「ちょっと、みつばちが、ふくろうみたいになっちゃった。」、SN「逆にみつばちがさ、あの、もうちょっと、小さすぎて何言っているのか分からない。」と、納得する「ブーン」ではない発言があった。子供がこうしたいと思ったイメージを表現することにこだわる姿が良いと考え、教師はあえて助言せず、「おちゃめ難しいね。」と返した。(表2) このように歌いながら、キャラクターのイメージと歌い方や声の出し方を合わせていった。

発言(原文ママ)	
T	今の良かったような気がするけど、みんなはどう。
CC	うん。
T	まだまだやって…
ST	なんかさ、ふくろうみたいになっちゃった。
C	ちょっと、みつばちが、ふくろうみたいになっちゃった。
SN	逆にみつばちがさ、あの、もうちょっと、小さすぎて何言っているのか分からない。
CC	はははは(笑い)
T	うわ、難しいね。
SS	だっておちゃめな感じなんだもん。
T	おちゃめ難しいね。
SR	なんで、だって優しいっていったじゃん。

表2 「あのね、のねずみは」の発話記録(10月15日)

③登場人物や物語から曲のイメージを広げる「小ぎつね」

「小ぎつね」の教材を用いて、登場人物や物語から曲のイメージを広げる活動を仕組んだ。「あのね、のねずみは」で学習した言葉からイメージすることを糸口に、登場人物の気持ちや場面の様子に合わせて歌うことができると考えた。

前時の取組でキャラクターになりきって歌うことが定着し、動作化や声まねを試す様子が見られた。歌いながら歌詞や挿絵に注目し、まず場面の季節を想像した。1番の季節は「あき」、2番の季節は「ふゆになりはじめ」3番は「まふゆ」という発言が出た。次の活動では、小ぎつねの気持ちや様子を想像した。1番は「うれしい」「るるるん」等、2番は「しょんぼり」「つまらない」、3番は「さびしい」「ねむたい」等の発言が出た。(図5)

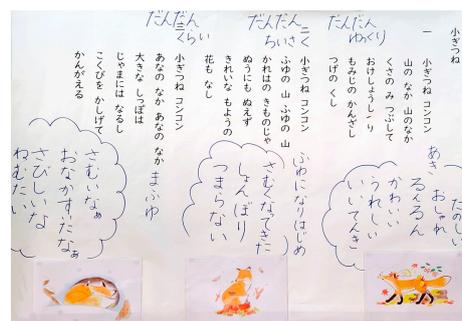


図5 場面ごと季節と小ぎつねの気持ち

10月21日の授業で、3番の「ねむたい」という様子が子供にとって表現しやすいと考え、「眠って、どうやって歌うんだろうね。」と問いかけた。するとSBが「ららら～うら～うらうあ…」と、あくびのような声を出し、眠たい様子を表現した。それを真似ながら教師が無伴奏で「小ぎつねこんこん～」と歌を促していくと、子供も歌いはじめ、その歌声がだんだん小さく、ゆっくりとなっていく様子が見られた。歌が終わるとIYが「ねえ、穴の中ってここがいいんじゃない。」と、すぐに発言した。その様子から、教師はIYの伝えたい気持ちを感じ取り、「穴の中、もぐってみなよ、じゃあみんな。」と、穴の中にいる小ぎつねの気持ちをイメージさせるよう動作化を促した。(表3) 動作化は楽しくなりすぎて、歌い方を見つけないという目的からずれることもある。しかし、動作化を取り入れることは、低学年の子供が歌うことに親しみをもちやすくなる要素となる。また動作化することで、より実感を伴ったイメージに広げていくこともできる。そのため、教師は子供の動作化を否定せず試してみることを促し、場面ごとイメージに合う歌い方を見つけられるようにした。

④自分でイメージを広げる「夕やけこやけ」

「夕やけこやけ」の教材を用いて、曲の音と歌詞から自分でイメージを広げる活動を仕組んだ。これまでの学習をもとに、イメージしやすい言葉や場面を見つけ、その様子に合わせて歌えると考えた。

まず、自分の好きなフレーズを選び、どこを選んだのか教師にも友達にも分かるように立って歌うよう伝えた。また、子供の質問から、フレーズは複数選んでもいいことを全体で確認した。歌が始まると、どの子供も立って歌っていたことから、全員が好き

T	ねえ、眠ってどうやって歌うんだろうね。
SB	ららら～うら～うらうあ… (あくびのような声を出している)
T	何、それ。小ぎつねこんこん～ (歌い始める)
TとCC	山の中～ あなの中～ (歌)
T	すごい眠そうじゃん。大きなしっぽは～ (歌い始める)
TとCC	しっぽは じゃまにはなるし (歌：あくびのような声)
T	眠そう。
TとCC	こくびをかしげて (歌：だんだん小さく)
TとCC	考える～ (歌：さらに小さく ゆっくりと)
IY	ねえ、穴の中ってここがいいんじゃない。
T	穴の中、もぐってみなよ、じゃあみんな。
CC	(がやがやと机の中にもぐる)

表3 「小ぎつね」の授業の発話記録(10月21日)

「夕やけこやけ」歌詞1番	人数
① 夕やけこやけで 日が くれて	4人
② 山の おてらの かねが なる	4人
③ おてて つないで みな かえる	7人
④ からすと いっしょに かえりましょう	4人
*全部 1人 歌に合わせて身体表現をしている	
「夕焼けこやけ」歌詞2番	人数
⑤ 子どもが かえった あとからは	5人
⑥ まるい 大きな お月さま	7人
⑦ 小鳥が ゆめを 見る ころは	11人
⑧ 空には きらきら 金のほし	10人
*全部 1人 歌に合わせて身体表現をしている	

表4 お気に入りのフレーズを選んだ人数(複数可)

①	夕やけこやけのなんか『ゆ～』のところが気に入っている
②	夕やけだから本当になんか鐘がなっているような感じで
⑦	なんか小鳥が本当に夢をみている感じ
⑦	なんか本当に小鳥が夢をみて寝るんだなど
⑦	小鳥が本当に夢をみて、そのつぎの金の星のところで、なんかきらきらしている感じがいい
⑦	Nちゃんたちみたいに夢をみているみたいだし、きれいな声と音楽だった
⑦	金の星はね、そんなに見たことないからちょっと見たいなと思っていて
⑧	金の星が本当なのか見てみたい
※番号は選んだフレーズ	

表5 授業中に発言した子の理由(原文ママ)

なフレーズを選べたことが確認できた。また、自ら歌詞や音に合わせて動き出す子供もいた。(表4)

歌い終わった後、教師がフレーズを選んだ理由を問いかけると、8名が発言した。(表5)理由を聞いた後は、「夢をみるころだから、起こさないよう小さめに歌っていたのですね。」等と、無意識の歌い方を外部化した。こうした外部化によって、子供自身や周りの子供が「優しい気持ちの時には声を優しく小さ目に出せばいい」と学べるようにすることが教師の意図であった。そのために、理由を聞いた後に外部化することを位置づけた。

#### 4. 考察

##### 4-1. 安心・開かれた雰囲気づくりの必要性

子供の挑戦や発見や気づきを促し、認め、時には待つことを意識して指導してきた。「子どもの学びの過程」の歌いながら試すことで、音やリズムを合わせたいという思いや意図が生み出されたと推察される。(図6)子供の様子を動画で確認すると、活動を楽しむ姿や歌いながら音やリズムを調整する姿、合っていないでも声を出し、自由に動作化する姿があった。この姿は、誰にも責められたり揶揄われたりしない、安心・開かれた雰囲気があってこそ見られる姿である。

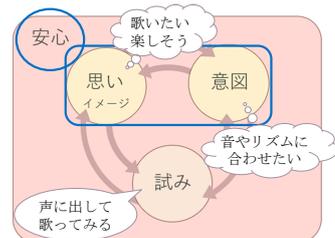


図6 安心・開かれた雰囲気

また、子供の振り返り内容を授業の中で活用することで、FH「ひさしぶりにいるかわざんぶらこをしたいです。」(表6)のように、自分のやってみたことを書く子供が増えてきた。そして、振り返りを自分から進んで発言したり、SR「みんなのふりかえりをたのしみにしています。」(表6)のように、友達の感想を楽しみにしたり真似したりする様子も見られ、間接的に友達と関われる力がついてきた。

振り返りの記述 (原文ママ)	
FH	わたしも小ぎつね見たいにおけしょうしたいです。みんないいこえだし、すごかったです。ひさしぶりにいるかわざんぶらこをしたいです。こんどは、ふくろうみたいにかっこをつけたいです。
SR	ぜんぶたのしかったけど、いちぼんたのしかったのは、こぎつねとあのねのねずみが、とくにきれいだったのしいきもちがつたあつたのしかったです。ゆうやけこやけもほうもほんとうにたのしかったです。みんなのふりかえりをたのしみにしています。

表6 子供の振り返りカードの記述(10月21日)

##### 4-2. 様子を思い浮かべるための単元構成の有用性

###### (1) イメージを表現することの楽しさ

「いるかはざんぶらこ」の教材で、役割としてのイメージをもつ活動を仕組み、指導を行った。身近なものに例え、動作化しながら歌うことで、思いが生まれ、それぞれが試行錯誤することを楽しむ姿につながったと考える。



図7 動作化して歌う子供

(図7、図8)また、感じたことを出し合える安心した雰囲気を楽しむ心地よさも得られたと推察される。

###### (2) 言葉から広がるキャラクターのイメージと表現したくなる思い

「あのね、のねずみは」の教材で、歌詞の言葉からキャラクターのイメージを想像し、歌いながらそのイメージが合うかを試すことを促す指導を行った。授業で言葉の意味を知り、何度も試しながら表現する姿や、教師が「今の良かったような気がするけど、みんなはどう。」(表2)と問いかけても、自分たちのやりたかったことと違うと答える発言が確認できた。言葉の意味を知ること、おちゃめなみつばちのイメージが広がり、それをなんとか表現したいという思いが強くなったからだと考える。(図8)また、試したくなるためには、解決したい思いとともに楽しさがないと続

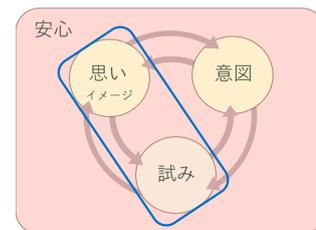


図8 子どもの学びの過程 試み⇄思い

かない。「いるかはざんぶらこ」でイメージを表現する楽しさの経験がここに生かされていることも推測される。

一方で、〈意図〉的な技能面については、ST「なっちゃった」、SR「なんで、だって優しいっていったじゃん」(表2)の発言から、どう歌うか分からない様子が確認できた。思いは広がるが、それを満たすだけの技術が伴わないでいるため、試行錯誤している状態であり、思いの実現には至っていない。

### (3) 登場人物の気持ちをイメージした表現

「小ぎつね」の教材で、曲の登場人物や物語から曲のイメージを広げるために、歌詞から気持ちを想像する問いかけや、動作化しながら歌い方の工夫を促していった。歌詞からイメージした「眠い」という小ぎつねの気持ちが、教師の歌声に促されながらも、歌声が小さくなり、速度もゆっくりになる様子から確認できた。気持ちを想像することや動作化することで、「眠そうに歌いたい」という思いをもつことができ、それにより子供の歌い方が変化していったと考える。(図8) また、言葉から場面や気持ちをイメージする点では、「あのね、のねずみは」での学習経験がここで生かされているといえる。

振り返りカードにある小ぎつねの学習に関する記述(表7)には、KY「小ぎつねのうたでだんだんゆっくりになってひくい音になるといいとおもいます」、OR「小ぎつねのうたいかたをした」とある。イメージを表現する歌い方に気づき、どう歌えばいいのかわかったことが確認できる。また、NR「小ぎつねのだんだんさみしくなるところがわかってきました」、ST「小ぎつねのかなしかったりたのしかったりしていました」の記述から、歌い方を

	振り返りカードの記述(原文ママ)
KY	小ぎつねのうたでだんだんゆっくりになってひくい音になるといいとおもいます
OR	小ぎつねのうたいかたをした
NR	小ぎつねのだんだんさみしくなるところがわかってきました
ST	小ぎつねのかなしかったりたのしかったりしていました
IY	小ぎつねがむずかしかったです

表7 振り返りカードにある「小ぎつね」の学習に関する記述を一部抜粋(10月28日)

変えることでイメージした小ぎつねの様子が変わることに気づいたことが確認できる。これは気持ちを想像することができたから、それに合う表現にしたいという思いをもつことができ、歌い方を変える工夫をしたり、その難しさを感じたりする様子が見られたと考える。IY「小ぎつねがむずかしかったです」は、動作化し、登場人物の気持ちになりきって歌いたいという思いやイメージの広がりはあるものの、歌い方で工夫するという意図的な技能習得には至っていないと自身で感じていると推察できる。

### (4) 様子を思い浮かべる段階的な指導による思いの表出

「夕やけこやけ」の教材で、音楽と歌詞から自分で情景のイメージを広げる指導を行った。好きなフレーズを選び、気持ちを込めて歌った後にその理由を問うことで、より意図的な表現に気づけるように促した。子供が選んだ理由(表5)のうち、下線部の理由を発言した子供は情景をイメージすることができたと考える。歌詞の言葉を頼りに、まるで自分がその歌の中の登場人物になっているかのような理由を述べている。これは、言葉から広がるイメージや気持ちを想像するこれまでの学習経験の中で、子供が得意とする表現の仕方に基づいて広がったイメージだろう。また、理由は言えずとも、身体を揺らしながら歌ったり、気持ちよさそうな表情で選んだフレーズを歌ったりしている様子を見ると、伝えたい思いのイメージがあるから好きなフレーズが生まれ、言葉にできない思いを動きや表情で表出していたと推察できる。(図9)



図9 動作化や思いを込めて歌う子供の様子

また、「夕やけこやけの『ゆ〜』のところが入っている。」(表5①)の理由を言った子供は、日頃から地声で大きな声を出す傾向があるが、この曲を歌う時には、自然と範唱の歌声と同じ、響きのある声を出していた。こんな風に声を出したいという〈思い〉や〈意図〉が生まれ、無意識に響きのある声

の出し方に調整していたと考えられる。

こうした(1)～(4)の段階的な単元構成における歌うことの〈試み〉の中で、子供の思いのイメージが広がり、深まって、表現したくなる思いの原動力になった。さらに、「子どもの学びの過程」の、歌う〈試み〉と〈思い〉のイメージを行き来することで、より豊かな思いやイメージをもつことができ、歌う〈試み〉の工夫〈意図〉につながるだろう。(図10)

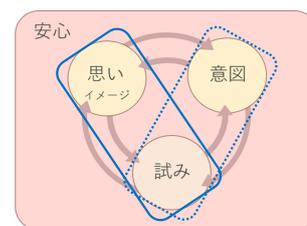


図10 子どもの学びの過程意図へ

## 5. まとめ

この研究では、子供が思いや意図をもって表現する力を引き出すために、「子どもの学びの過程」の図をもとに、安心・開かれた雰囲気づくりと様子を思い浮かべる単元構成を仕組み、〈試み〉たことを外部化させていく歌唱指導を考え、実際の授業を行った。

まず、授業実践研究から、安心・開かれた雰囲気を生み出すために、子供の挑戦を促し、肯定的に認める姿勢を大事にした指導は、子供自身の思いの表出を促し、自ら歌い方を調整しようとする力を引き出すことを確かめることができた。また、振り返りカードを使用し、その内容を授業の中で活用することで、子供の「やってみよう」気持ちを引き出す、子供主体の授業の展開を可能にした。

次に、歌いながら試していく〈試み〉の中で、〈思い〉のもとになるイメージを思い浮かべる活動を段階的に学習する単元構成を考え、授業を行ってきた。その結果、思いや意図をもって表現する子供の姿や振り返りの記述を見ることができ、教師が教えたことを再現するだけではない、子供自身のイメージや思いから生み出される表現活動ができた。以上の結果から、この単元構成が有効であるといえる。

一方で、今回、イメージの広がりも多く見られたものの、それを表現するための十分な技能の獲得までには至らなかったというところは課題として残った。自身の思い・イメージの実現のために、どう声を出したらいいのかを考え、その技能習得のために試したくなるような手立てを考えたり指導の在り方を検討したりしなければならない。さらに、こうした子供の思いは時にして、なんでも楽しく自由にやらせればよいと誤解されがちである。子供のやってみよう思いや言動を、如何にして学びのための活動に導いていくのかということは、教材研究を含めた教師の力量に任される部分が多く、今後の解決すべき点として残された。

しかし、この研究で実践した歌唱指導を行うことで、子供自らがこうしてみたいという気持ちを引き出すことができたという事実と成果は、今後、そうした技能獲得の原動力となると期待することができ、また、他の領域や他教科での活用の可能性も感じた。本実践研究で得られた示唆は、今後の歌唱指導の在り方を再考する上で重要な手がかりとなるだろう。

## 参考・引用文献

- ・西出真理 (2024) 「子どもが思いや意図をもって表現を試みるための指導の工夫—小学校音楽科における歌唱の活動の実践—」 教育実践研究報告書 山梨大学教職大学院
- ・新野貴則・市川安紀 (2023) 「図画工作科における主体的な学びの実現を目指す指導方法に関する研究—学びの構造と授業の構造、また発問の構成—」 『美術教育学』 第44号 美術科教育学会
- ・文部科学省 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説音楽編』 日本文教出版
- ・小原光一ほか20名 (2024) 『小学校の音楽2』 教育芸術社
- ・小原光一ほか20名 (2024) 『小学校の音楽2 教師用指導書研究編』 教育芸術社